

ごん吉くんレポート

～南吉よもやま話～

第35回

『赤い鳥』で出会った人々②

きたはら はくしゅう
北原白秋

新美南吉記念館で開催している『赤い鳥』創刊100年記念特別展「『赤い鳥』がくれたもの」新美南吉・夢と出会いたい（10月28日）から南吉が『赤い鳥』を通して出会った人を紹介する2回目。今回は北原白秋をとりあげます。

大正7年に創刊された雑誌『赤い鳥』で、鈴木三重吉の童話や綴方指導と並んで、もうひとつの柱になったのが、北原白秋の担当する童謡でした。

童謡という言葉は、もともと伝承童謡、つまり子どもたちの中で自然に生まれ、歌われてきたわらべ歌を指して使いました。それに対して白秋は、大人が創る子どもの歌として創作童謡を始めました。その背景には、学校で教える唱歌への批判がありました。唱歌は大人の美意識や国家の価値観を難しい文語で詠ったものが多く、子どもの歌としては不自然だと考えていたのです。

白秋は、「童謡は童心童謡の歌謡である」と言いました。「子どもの心を子どもの言葉で詠う」ということです。先入観を持たない子どもは物事を無心に捉え、新鮮な驚きを素直に言葉にします。そうした大人が失った表現力の源として白秋が讃えた童心は、昭和に入ると、純粹無垢の一面だけで捉えられ、その限界性が批判されます。しかし、白秋自身は、子どもの持つ残酷さや寂しさなどネガティブな側面も含め、多様な生活感情を童謡に詠おうとしました。

そんな白秋に深く傾倒していたのが、まだ創作を始めて間もない中学生時代の新美南吉でした。半田の書店で、童謡集『月と胡桃』を見つけた時には、「北原白秋の童謡集が出ていた。が悲しいかな、余りに値が高すぎる。大枚四円五十銭也とは！」と嘆き、それでも諦めきれず、内職仕事をして本代を稼いでいます。卒業式の前日には、白秋が

編んだ『赤い鳥童謡集』を買い、「現在地球上にこれよりすぐれた童謡集はないと思う」と書きこみました。

その2か月後の昭和6年5月、童謡「窓」が初めて『赤い鳥』の投稿童謡欄に入選します。以降、南吉の童謡は毎月のように入選し、2年の間に計23編も掲載されます。

こうして白秋に認められた南吉は、翌昭和7年から上京し、白秋門下の一人として文学修業に励むようになりました。そして、白秋門下の若手詩人たちとの交流を通して、『赤い鳥』を通じた人の繋がりをさらに広げていくのです。



北原白秋（小田原市立図書館提供）

アンケート

- Q1 今号でよかった内容や写真があれば教えてください。
- Q2 今号を読んだきっかけに行動したこと、または、したいことはありましたか。
- Q3 取り上げてほしい内容や企画、広報に関するご意見・ご感想などありましたらお聞かせください。

回答方法

住所、氏名、年齢、アンケートを書いて、ご送付ください。

あて先

〒475-8666

東洋町2-1 企画課

Eメール

kouhou@city.handa.lg.jp



編集後記

市 報を通じてもつと人の想いや気持ちをみなさんに伝えたいと考えました。そこで今回、現場取材を行い、市民や職員の顔・声を多く掲載する特集を初めて作成しました。そして、多くの方に取材のご協力をいただきました。子育てに悩むお母さんに少しでも何か感じていただければと考えています。

私はまだ結婚する予定は当分なさそうですが、子育てをするお母さんの大変さを強く感じました。将来は、イクメンを目指します。（浅野）